

日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

Keio University



国際化、情報化、価値観の多様化など、社会環境は大きく変化しています。

それに伴い、大学にも教育、研究、社会貢献など諸方面における変革が求められています。

国立大学の法人化により、一橋大学もその渦中にあります。

では、これからの大学はどうあるべきでしょうか。

日本私立大学連盟会長でもある慶應義塾の安西祐一郎塾長を訪ね、

慶應義塾の三田キャンパスにお邪魔しました。

これからの高等教育に期待されることについて、人材論をはじめとしてきめ細かく話し合いました。

多様化する世界に対応できる

「知」「情」「意」を身につけた自立した人材を輩出する

これまで産業界や行政関係の

トップの方をお招きして行われた巻頭対談に、

初めて大学人にご登場いただきました。

建学150年を目前にした慶應義塾の安西祐一郎塾長です。

私立大学と国立大学、総合大学と社会科学に集約された大学と

二つの大学は対照的ですが、共通の課題もありました。

対談では人材論や大学改革の現状、期待される大学像、

日米の「知識」観の違いなど、多岐にわたって語り合いました。

安西

慶應義塾長

祐一郎氏

安西祐一郎（あんざい・ゆういちろう）

1946年生まれ。1969年慶應義塾大学工学部卒業、1974年同大学大学院工学研究科博士課程管理工学専攻修了、工学博士。1971年慶應義塾大学工学部助手、1976～78年カーネギーメロン大学博士研究員、1981～82年カーネギーメロン大学客員助教授、1985年北海道大学文学部行動科学科助教授、1988年慶應義塾大学理工学部電気工学科教授、1989年同大学院理工学研究科計算機科学専攻教授兼任、1990年マギル大学客員教授、1993～2001年慶應義塾大学理工学部長・大学院理工学研究科委員長、2001年より慶應義塾長。社団法人日本私立大学連盟会長、中央教育審議会大学分科会会長、環太平洋大学協会副会長など役職多数。





辛さを乗り越り楽しさを見つけて 学問の体系を身につける

杉山 今日はこの対談に初めて大学人をお迎えします。そこで、私立と国立とを問わず共通の課題である人材に対する考え方から、産学協同、求められる大学像まで、いろいろ伺いたいと思います。

グローバル化が進み、科学技術や知の重要性が増している中で、社会のニーズへの対応という点で大学への不満が寄せられています。いい意味では期待の表れといえるかもしれませんが、大学はこれに対する答えを出していかなければなりません。その基本は、もちろん教育です。時代の要請に応じて、どういう人材を世の中に送り出していくかということになると思います。そこでまず、求められる人材像から。

安西 これからの時代に要請される大学卒の人材としては、多様であることが求められます。すでに国際社会、地域、産業すべてが多様化しており、例えば日本においては終身雇用、年功賃金制が崩れ、個々の努力で道を開く時代が到来しました。日本の大学

杉山 武彦

一橋大学長

杉山武彦（すぎやま・たけひこ）

1944年生まれ。1968年一橋大学商学部卒業後、1970年同大学大学院商学研究科修士課程修了、1974年一橋大学大学院商学研究科博士課程単位修得退学。1974年名城大学経済学部専任講師、1977年一橋大学商学部専任講師、1980年同大学商学部助教授、1986年同大学商学部教授、商学部長、副学長を歴任し、2004年12月より現職。研究分野は交通経済。



が、どういう人材を輩出すべきか。その基盤となる第一は「知」の力です。合理的かつ批判的にモノを考える力です。物事を鵜呑みにして二番煎じの発言をするのは日本の大学の卒業生にはして欲しくない。次に、「情」の力。人の心の痛みを感じ取れる力です。最近、自分だけがよければいいという風潮が強くなっています。しかし、他人の協力を得て新しいものをつくり出すためには、当然のことながら人の気持ちがわからなくてはなりません。三つ目が、「勇気」。人の後をついていくのではなく、「意」を持って自ら先頭に立つ意志と勇気です。慶應義塾大学でいえば、「独立自尊」の精神です。この「知情意」の総合力を身につけることが、日本の大学の卒業生に求められます。

杉山 一橋大学では、従来から「キャプテンズ・オブ・インダストリー」を標榜していますが、慶應義塾大学では「独立自尊の精神」ということですね。私も、「情」はたいへん重要だと思います。ただ、「知」の教育については難しいながらも体系のようなものがありますが、「情」の教育はどのようになさるのですか。

安西 私は、体験が重要だと思います。座学だけではなく、実地体験を重ねることです。もちろん、書物を含めて学問から学ぶのが大前提になるのはいうまでもありません。実際の体験をすることで、他人との関わりを持つことです。挫折や感動の体験を積み重ねていくことが重要です。

杉山 私たちの学生時代は、今よりのんびりとしていて万事にお

おらかでした。それをエンジョイしてきたわけですが、今は違います。システムティックな教育でミニマムのレベルをしっかりと確保することに力点が置かれる傾向にあります。その裏側で、のびやかで自由で多様な学びが失われているような気がします。

安西 これは私の個人的な見解ですが、今の大学教育は中途半端のように思います。本格的な学問の体系を教える訳でもなく、現実について教える訳でもない。ましてや、現実の課題の解決能力を高めるためのものではないことが多い。これは初等教育でも中等教育でも同様です。

学問の体系を学ぶのはかなり辛いことで、辛抱と忍耐が必要です。しかし一方では、自分の興味、関心のある分野ではのびのび芽が出ていくような感覚を自分でつくっていくことが大切です。学びには、この2つの要素が必要で、こうしたメリハリをつけたカリキュラムを組む必要がありますね。

計量化できる知識と じわじわ染み込む知識

杉山 昔の個人的な体験による知識しかないのですが、アメリカと日本では教育の仕方もずいぶん異なるように感じています。私の場合、例えば学生時代に初めて会計学を履修したときには、会計の性格とか意義などから授業が始まりましたが、留学先での会計の勉強では、初日から貸し方と借り方の記帳でした。

安西 アメリカの大学では、かなりの量の知識を叩き込もうとしますね。そもそも知識の捉え方が違うようです。知識は切り売りできるもので、「何単位の知識」として量れる感覚です。日本の場合は、知識はその境界がわからないうちにジワッと染み込んでくるようです。ですから、2単位の授業でも4単位の授業でも知識の量とは関係がないような捉え方をすることが多い。私がアメリカで感じたのは、頭にCD-ROMをはめ込まれる感覚でした。一方の日本では、ゼミでの先生との付き合いを通じてじわじわと知識が体に入ってくる感じですね。

杉山 今は、全体にアメリカ的色彩の強い教育法が主流を占めているような印象があります。

安西 すべての大学が実施すべきだということではありませんが、私は大学によっては知識の体系をきちんと教えるやり方を取る必要があると思っています。ただし日本では、変わるとなるとすべての大学が一斉に変わってしまうようなところがあるのでそのことは心配ですが。

さらにいえば、2つの学びのあり方をバランスよく経験できるように工夫するのいいと思います。例えば、1～2年次には本格的な教養教育によって学問の体系をしっかりと学び、3～4年次にはゼミでの



びのび教員と接する中で知識を身につけていくのが良いと思います。
杉山 プログラムド・テキストブックの活用などはとても効率的だと思いますが、それだけでは「知情意」の揃った人材育成は難しいというわけですね。

悔いのない毎日を過ごす 何かが見えてくる

杉山 学生に対して常々言っておられること、伝えたいことは何でしょうか。

安西 塾長になってから、直接学生に接触する機会が少なくなってしまったこともあり、1年生が入学した4月に塾長講話を行っています。講話1時間、質疑、懇親会といった流れです。そこで必ず言うのは、「少年老いやしく学成り難し」ということです。入学してきて、「違う学部の方がよかった」「入る学部を間違った」と感じる学生はいます。「でも、やってみなければわからないよ。その日その日を一所懸命に過ごしてごらん。悔いのないように毎日を過ごすと、何かが見えてくるよ」と語りかけるのです。スチューデントアパシーとか5月病とかいいますが、そんな中で、こうした言葉が胸に響くようです。

杉山 嬉しくなることを伺いました。実は最近、ある奨学財団の会誌に“決める”と“決まる”というタイトルのエッセイを寄稿しました。大学に入ったからといって、直ちに進路や目指す職業を決める必要はない。今を充実させることが重要で、それが後の役に立つ、というメッセージを送ったところでした。

安西 そのとおりですし、そう言ってもらって学生は安心します。私自身は理系出身ですが、実際に、「本当にやりたい研究分野はこれだ!」と思ったのは、30歳ぐらいになったときのことです。私は幸運でしたが、1年や2年でダメだと考えることはありません。

杉山 せっかく研究分野の話が出ましたので、先生のご専門についての話をお聞かせいただけますか。

安西 私の専門は、「認知科学」です。狭義でいえば、人間の思考、記憶、学習などの過程で人間が情報をどう処理していくかなどの仕組みの研究です。この分野で有名なハーバート・サイモン教授は、シカゴ大学の政治学出身で、行政学、そして意思決定について研究をし、ノーベル経済学賞を受賞しましたが、私は情報科学から始めて心理学、そして認知科学の分野で、人間の思考と学習の過程を情報処理として捉えるようになったのです。

学習や知識という問題は私の専門分野に近いのですが、人間が知識をどう身につけるかを解明するのは大変面白い分野です。ところで、先生のご専門の交通経済政策は、社会の最も重要なテーマの1つです。交通経済、経済政策の問題にも若い人にもっと関



心を持ってもらいたいですね。

杉山 私も、そう期待しています。それについては、この分野で素晴らしい伝統を持っておられる慶應義塾大学の先生方と大いに力を合わせていきたいと思えます。

社会科学こそ 社会全体に貢献できる宝庫

杉山 慶應義塾大学は総合大学であるのに対して、一橋大学は社会科学に特化している大学です。産学連携など、大学が社会から求められているもののイメージも違うかもしれませんが、いかがですか。

安西 産学共同研究といいますが、研究の基本はあくまで研究者が自発的に取り組むべきものです。大学の役割は、それをどうバックアップするかということでしょう。慶應義塾大学には9学部と11研究科があります。どうしても縦割りになりがちです。学部、研究科の枠を超えたテーマを推進できるように、数年前に「総合研究推進機構」をつくりました。そのもとに知的資産センター、研究推進センター等を置き、戦略的に総合研究や産官学連携、知財活動などを推進する役割を担っています。例えば、外部資金関係の情報整理だけでも大変ですから、会議等を通じて定期的にそうした情報を流しています。研究者は研究したいのですから、いろいろな情報を流して支援することで好循環が生まれるようにしています。

ご参考までに、特許取得件数では慶應義塾大学は日本の大学で第1位です。5つに分散しているキャンパスにおける研究活動の支援のために、各キャンパスに研究支援センターを設置して、研究者の研究活動を実務的な面からサポートしています。産学連携プロジェクトや共同研究などの数は数えきれません。

杉山 一橋大学でも、教員が科学研究費補助金などの競争的資金に対して積極的に手を挙げやすくなるように、研究活動推進支援室というものを設置してサポートしています。

先生がおっしゃるように、本来、研究は研究者個人の関心と意欲に基づいて行われるものです。ただ最近では、「21世紀COEプログラム」のように大学全体としての研究テーマが問われることが多いので、魅力的な大きなテーマを設定して、その下に多くの研究者が参画して共同研究をするようにしなければならなくなっています。

安西 さきほど紹介した総合研究推進機構のもとに「先導研究センター」があります。この「先導」は、福澤諭吉の「全社会的先導者たらんと欲するものなり」という言葉から取ったものです。ここでは全塾的な組織としての研究センターの設置・運営を柔軟に行っています。外部資金による時限的な研究組織を自由につくれるようにしたのです。こうした先導研究センターが現在10あって、異なる分野間におけるコミュニケーションが活性化しています。

杉山 一橋大学は学部や研究科の数も少なく、とくに縦割りの弊害といったようなこともないように思っていますが、今後はさまざまなニーズやプロジェクトに合わせて、研究体制を弾力的に組織する必要があると考えています。ただ、社会科学の分野での産学協同は、なかなか理工学系の場合のように大規模にというわけにはいきません。

安西 社会科学こそ産業界や社会全体に大きな意味で貢献できる宝庫であると思います。競争的資金の額で比べる必要はまったくありませんし、解決すべき課題は数多くあります。文部科学省には、人文社会科学分野の発展を支援するよう話しています。社会的影響も大きい分野です。

杉山 国際交流分野では、慶應義塾大学はいかがですか。

安西 ここ数年、急速に強化している分野です。2005年に国際連携推進機構を設置し、スピーディな意思決定を行い、全学レベルで戦略的に国際交流を行うようにしています。

受け入れ留学生の数はまだ多くはありませんが、質のよい学生の受け入れに力を入れています。他方で、慶應の学生を海外に派遣する支援を強化しています。今年創立150年を迎えますが、その事業



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？



計画の中に30億円の「未来先導基金」があります。この基金の目的の一つは、学生の国際活動を支援することです。

杉山 一橋大学も今、財政基盤の確立に取り組んでいるところです。

安西 日本では寄付文化が育っていません。アメリカとは国の成り立ちや所得格差の違いもあってか、「教育は社会が担う」という文化が育っていないのです。幸いにして、慶應義塾は卒業生の方々が協力してくれる伝統があります。これは一橋大学も同様ですね。

国立大学のあり方を どう考えていけばいいのか

杉山 大学の機能分化が必要とされています。多様性が求められているということだと思いますが、あらためて、求められる大学像についてはどうお考えですか。

安西 基本的には、教育と研究を軸にして社会に貢献するということになるでしょうが、私は教育、研究、医療、国際貢献を含む社会貢献、経営の5つが重要だと考え主張しています。この5つの分野で慶應義塾大学は国際的にトップレベルでありたい、世界的な視野でさらに伸ばしていきたいということです。

杉山 5つ目に経営という言葉が出てきて、ドキッとしました。かつては、国立大学は大学経営を意識する必要がありませんでした。しかし今では、それは許されません。これからの大きな課題だと思っています。

私自身は、経営ということだけでなく、国公立大学と私立大学の間に本質的な違いはないと考えているのですが、私立大学側から見るとどうなのでしょう。

安西 法人化以降、かえって国立大学が何を目指しているのかが、あいまいになったような気がします。国として政策的に行っていくべき高等教育を担うのが国立大学だと考えていました。現在では国が国立大学法人に委託しなくてはならない高等教育や研究がどれだ

けあるのか、その範囲は随分狭まっていると思います。

杉山 国が政策として行おうと考えてきた高等教育を、今では私立大学も同様に担っているという考え方もありますね。

安西 日本はこの150年近くの間、中央集権の強化のもとに、何度かの戦争、バブル経済を経てGDP世界2位の国になりました。追いつき追いこせのこれまでの時代は官主導もある意味で一つの道だったかもしれません。明治維新は、象徴的にはアジアで初めて近代の歩みを始めた時にあたります。その後百数十年を経て、これからはアジアでもかつてない成熟した民主社会を創っていかなくてはなりません。それには、福澤諭吉の『瘦我慢の説』の冒頭に「立国は私なり 公に非ざるなり」とあるように、個人の自立とそれによって公共が創られていくための社会基盤が必要になります。日本もようやくそういう時代に到達しつつあるように思います。国立大学法人のあり方は、こうした大きな流れの中で考えていかなければなりません。これまでもそうですが、慶應をはじめとする私学のあり方は、活力のある多様な人間を育成し、多様な価値を創造していくべき日本では、きわめて重要になっていくと思います。

杉山 国立大学として、その回答をきちんと用意しなければなりません。

安西 一橋大学は、もともと私学から発して、自らに立った歴史があり、私立大学のような性格も持っておられます。素晴らしい伝統と基盤の上に、社会科学で素晴らしい活動をなさっており、その分野に集約している強みもあります。社会科学は、人間と社会について深く考え、よい社会を継続し、創りだしていく基盤であり、その果たす役割は大きい。成熟した民主社会の発展のためにますます貢献されることを期待しております。

杉山 私立大学から見た国立大学法人や社会に求められる人材像の捉え方に関心がありましたので、今日はたくさんの方を安西先生に伺いました。多くのヒントを頂戴できましたし、検討すべきテーマも浮かび上がってきました。たいへん有り難うございました。

